

## 2022年7月10日（日）聖霊降臨後第5主日

### 銀座教会 主日礼拝（家庭礼拝）

礼拝招詞「主を仰ぎ見る人は光と輝き 辱めに顔を伏せることはない。この貧しい人が呼び求める声を主は聞き苦難から常に救ってくださった。主の使いはその周りに陣を敷き 主を畏れる人を守り助けてくださった。」 詩編34編6～8節

#### 主の祈り

交読詩編 詩編107編17～22節

彼らは、無知であり、背きと罪の道のために屈従(くつじゅう)する身になった。

どの食べ物も彼らの喉には忌むべきもので 彼らは死の門に近づいた

苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと 主は彼らの苦しみに救いを与えられた。

主は御言葉を遣わして彼らを癒し

破滅から彼らを救い出された。

主に感謝せよ。主は慈しみ深く 人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。

感謝のいけにえをささげ

御業を語り伝え、喜び歌え。

#### 使徒信条

讃美歌 448 みめぐみを身にうくれば

聖書 創世記32章23～31節

23 その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。24 皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、25 ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。26 ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。27 「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」28 「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、29 その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」30 「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。31 ヤコブは、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。

#### 牧会祈禱

天の父なる神さま。この地上の歩みの中で、私たちは試練や困難の中に置かれつつも、なお、あなたが私たちと共にいてくださり、他の何物にも変えがたい、朽ちることのない希望を与えられていることを感謝いたします。

私たちは、天地万物を創造されたあなたこそが、私たちの造り主であり、救い主であるということ、聖書を通して知ることが許されています。今年度は旧約聖書、特に今は創世記において記されている一つ一つの出来事から、あなたが私たちに祝福をお与えくださっているということを聞いております。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であられるあなたが、一人一人の歩みを祝福してくださいますように。 アーメン。

説教 「祝福してくださるまでは」

伝道師 山森 風花

本日与えられました聖書箇所、創世記 32 章 23 節から 31 節において、イサクの息子ヤコブは、叔父であるラバンのもとで得た大勢の家族、奴隷、家畜を連れて深い溪谷を流れるヤボク川を渡ろうとしています。このヤボク川を渡れば、ヤコブは故郷の地に入りますが、ヤコブにとって、故郷の地に帰るとするのは、自分を殺そうとしていた双子の兄エサウとの再会をも意味していました。

そもそも、ヤコブが叔父であるラバンのもとに行くことになったのも、父イサクを騙して祝福を奪い取ったヤコブを憎んだ兄エサウの「父の喪の日も遠くない。そのときがきたら、必ず弟のヤコブを殺してやる。」という 27 章 41 節に記されている兄の殺意から逃れるためのものでした。兄エサウからの逃亡は、祝福を奪い取る計画を立てた母リベカによって計画され、行われました。母リベカは、27 章 45 節で「そのうちに、お兄さんの憤りも治まり、お前のしたことを忘れてくれるだろうから、そのときには人をやってお前を呼び戻します。」とヤコブに言って彼を送り出しました。しかし、母リベカからの使者がヤコブの元にやって来て、ヤコブは安心して故郷に帰る準備ができた、とは聖書のどこにも記されていないのです。

つまり、彼は兄エサウの憤りが今も治っていないのではないか、という不安の中で、故郷の地へと入るこのヤボク川を渡らなければならない、そのような危機的な状況に今、置かれているのです。ヤコブがどれほど兄エサウとの再会を恐れていたかについては、直前の 32 章「エサウとの再会の準備」という小見出しが付けられた箇所に記されています。そして、この箇所では、創世記の中で最も長い祈りが記されています。

10 ヤコブは祈った。「わたしの父アブラハムの神、わたしの父イサクの神、主よ、あなたはわたしにこう言われました。『あなたは生まれ故郷に帰りなさい。わたしはあなたに幸いを与える』と。 11 わたしは、あなたが僕に示してくださったすべての慈しみとまことを受けるに足りない者です。かつてわたしは、一本の杖を頼りにこのヨルダン川を渡りましたが、今は二組の陣営を持つまでになりました。 12 どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄は攻めて来て、わたしをはじめ母も子供も殺すかもしれません。 13 あなたは、かつてこう言われました。『わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を海辺の砂のように数えきれないほど多くする』と。」 (32 章 10-13 節)

「わたしは兄が恐ろしいのです」、とあるように、ヤコブの頭は、今やエサウとの再会における恐れで支配されていました。彼は兄から襲われることをひどく恐れていました。

しかし、本日与えられた聖書箇所、創世記 32 章 23 節から 31 節において、ヤコブを始めとした誰もが予想していなかった襲撃者によって、彼が襲われるという驚くべき出来事を私た

ちは今、目撃しているのです。23 節から 25 節に「23 その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。24 皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、25 ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。」と書かれているように、ヤコブが独りきりになったとき、暗闇の中で正体不明の襲撃者が彼を襲いました。

この格闘がどのように繰り広げられたのかについて、私たちは詳しく知ることはできませんが、夜明けまで格闘したということから、長時間にわたる戦いであつたということは知ることができます。つまり、決着が中々つかなかったということです。

しかし、26 節には、「26 ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。」と書かれています。大変な重傷をヤコブは負ったのです。このまま戦い続ければ、決着がつき、きっとヤコブは殺されていたことでしょう。ですが、27 節には「27 「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」」という驚くべき二人のやりとりが記されているのです。

私たちはこの暗闇の中で突如現れた襲撃者が一体何者であるか知りませんでした。しかし、ヤコブは夜明けまで続く戦いの中で、この方が神ご自身、もしくは神の使いであると知ったのでしょう。だからこそ、ヤコブは重傷を負い、痛みをおぼえながらも、今、この方を離さないのです。兄エサウとの再会を前にして、ヤコブにとって最も必要なもの、それがこの方からの、神様からの祝福だったのです。彼はこの方が祝福してくださるまでは、決して離さないのです。

もちろん、神様はヤコブを一方的に殺すこともできたと思います。しかし、それは神様の御心ではありませんでした。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」という神様に対して、「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」と返すヤコブの態度は、神様の祝福に対する絶対的な信頼あつてのものでした。

では、神様はすぐさまこのヤコブの願いを聞いてくださるのかというと、そうではないのです。28 節から 29 節に「28 「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、29 その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」」と書かれている通りです。

祝福を求めたにも関わらず、ヤコブは名を問われるのです。名前を問われ、それに答えるというのは、現代を生きる私たちとは違い、古代の人々にとって、非常に重要な意味を持っていました。なぜなら、古代の人々にとって、名前はその人の存在と深く結びついていると考えられていたからです。つまり、ヤコブが名前を教えるということは、自分の存在、つまり、それは彼の本質をこの方に全て明らかにするということを意味するのです。

彼の存在、彼の本質はヤコブという名前によって、示されています。それは 27 章 36 節において、祝福を騙し取られたエサウが「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り（アーカブ）欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった。」と叫んだとおりです。彼は今、兄エサウを押し退け、欺いた罪にまみれた自分を、「ヤコブ」という名前を告げることによって、神様

の前に明らかにするのです。すると、神様はこの罪にまみれた彼の名前ではなく、新しい名前を授けるのです。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」と 29 節で書かれている通りです。イスラエル、それは神様が彼を認めてくださったことを示す名前であり、そして、後に神の民を示すことになる、名誉ある名前です。彼は新しい名前と共に、新しい存在を与えられたのです。

続く 30 節には、「「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。」とあります。先ほど確認しましたとおり、名を明かすということは存在を明け渡すことを意味しています。古代において、人間が神の名前を知れば、神を呼び出し、その力を思うがままにできると考えられていましたので、このヤコブの質問は、人間の厚かましい欲望を表しているという箇所であるという事ができると思います。

しかし、このヤコブの食欲な質問に対して、この方はお答えにならないのです。神様は名前を問われてもお答えにならない自由をお持ちだからです。その自由によって、新しいイスラエルという名前をヤコブに授けるだけではなく、「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」という 27 節の彼の願いをまことに叶えてくださるのです。

30 節において、ようやくヤコブは願いが叶えられます。なぜなら、ヤコブの「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」という願いは、まず、彼が自分の罪にまみれた本質を明らかにし、そして、新しい名前、新しい本質を与えられる必要があったからです。この新しい名前、存在こそが、神の祝福を受けるに値する存在なのです。31 節で、ヤコブは「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言っていますが、彼は腿を打たれ、重傷を負いながらこれから生きて行かねばなりません。彼の姿は明らかに敗北者そのものです。しかし、イスラエルという名前によって、その勝利が認められるのです。

ヤコブはこの格闘において、敗北と裁きを味わいました。しかし、勝利と祝福をも神様によって与えられたのです。まことにそれは神様の自由によって、与えられたのです。ヤコブの罪にも関わらず、祝福を与えてくださるこの神様こそが、アブラハム、イサク、ヤコブの神であり、私たちの主なる神様であり、御子イエス・キリストを私たちにお与えくださった神様なのです。

祈り 天の父なる神さま。罪深い私たちを滅ぼすこともできたはずなのに、あなたはヤコブを生かし、祝福を与えたように、私たちを罪によって滅ぼし尽くすのではなく、あなたの自由によって、御子をこの世にお与えくださいました。あなたの自由な、そして、大きな愛に感謝して、私たち信仰者として今週も一週間、それぞれの置かれたところで歩んでいく事ができますように。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

讃美歌 288 たえなるみちしるべの

献金

頌栄 544番

祝祷 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、  
あなたがた一同と共にあるように。

アーメン